

# 海上保安庁合同訓練記録

2020年7月1日

# 目次

1. 訓練概要
2. 訓練参加者名簿
3. 訓練状況写真
4. 検討事項と確認事項

海上保安庁第三管区海上保安部 特殊救難隊とライフセーバーによる  
救難連携訓練の実施について

1 目的

今夏は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、神奈川県、茨城県、千葉県のすべての海水浴場が閉鎖されることから、海水浴場の安全対策をしっかりと講じていく必要があり、異例の夏に向けて、海上保安官とライフセーバーとの連携訓練や意見交換を行い、事案発生時の救助体制の強化を図ることを目的とする。

2 実施日時

2020年7月1日（水） 13：00から17：00

3 実施場所

横浜海上防災基地

4 参加機関

- (1) 第三管区海上保安本部 交通部安全対策課 警備救難部救難課
- (2) 羽田特殊救難基地
- (3) 公益財団法人日本ライフセービング協会

5 実施項目等

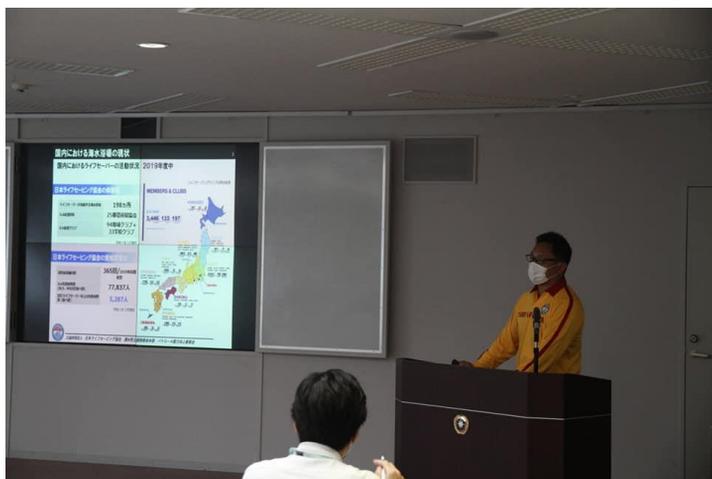
- (1) ライフセーバーによる救助訓練展示（レスキューチューブ、ボード等を使用した救助）
- (2) 海上保安庁の吊上げ救助訓練展示
- (3) 海上保安庁特殊救難隊とライフセーバーによる連携訓練
  - ・ライフセーバーがレスキューチューブにより救助した被救助者をヘリコプターを模した装置から水面に到着した海上保安官に引継ぎ、被救助者を吊上げ救助するもの（上記（1）、（2）訓練を複合したもの）
- (4) 検討会

【日本ライフセービング協会と第三管区海上保安本部の合同訓練参加者名簿】

	所属クラブ名	役職	氏名	フリガナ	備考
1	公益財団法人日本ライフセービング協会	理事長	入谷 拓哉	イリタニ タクヤ	(見学)
2	静岡県ライフセービング協会	理事/浜松ライフセービングクラブ 理事長	古橋 理	フルハシ トオル	(見学)
3	静岡県ライフセービング協会	理事/下田ライフセービングクラブ 理事長	文珠寺 裕之	モンジュジ ヒロユキ	(見学)
4	静岡県ライフセービング協会	事務局長/東海大学海洋学部ライフセービングクラブ監督	諸節 智章	モロフシ トモアキ	(見学)
5	静岡県ライフセービング協会	下田ライフセービングクラブ	菅沼 寛也	スガヌマ ヒロヤ	
6	静岡県ライフセービング協会	下田ライフセービングクラブ	塚本 健二	ツカモト ケンジ	
7	静岡県ライフセービング協会	下田ライフセービングクラブ	重田 佳祐	シゲタ ケイスケ	
8	静岡県ライフセービング協会	静波サーフライフセービングクラブ	天野 駿介	アマノ シュンスケ	
9	静岡県ライフセービング協会	用宗ライフセービングクラブ	蒔苗 和晴	マカナイ カズハル	
10	神奈川県ライフセービング協会	湯河原ライフセービングクラブ	西山 俊	ニシヤマ シュン	
11	千葉県ライフセービング協会	九十九里ライフセービングクラブ	池端 拓海	イケハタ タクミ	
12	公益財団法人日本ライフセービング協会	広報室/下田ライフセービングクラブ	山口 智史	ヤマグチ サトシ	
13	公益財団法人日本ライフセービング協会	事務局次長	中山 昭	ナカヤマ アキラ	(見学)
14	公益財団法人日本ライフセービング協会	JLA溺水防止救助救命本部 副本部長	菊地 太	キクチ フトシ	



訓練実施前に海上保安庁で使用するエバックハーネスなど諸元性能を詳しく教養受けた。



訓練実施前に各報道機関に向け昨年までの海水浴場におけるライフセーバーの対応実績を説明した。



訓練実施項目(1)として、ライフセーバーによるレスキューチューブレスキューとボードレスキューを造波装置稼動中の訓練施設で実施した。参加したライフセーバーの見学者以外はすべて入水した。

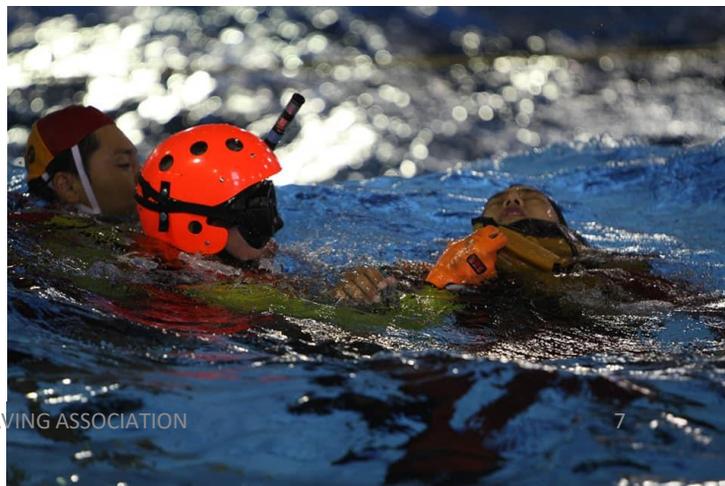


訓練実施項目 (3) として、水面の要救助者をライフセーバーがレスキューチューブを活用し救助し、その後、ヘリコプター (以下ヘリと称す) から「高所エントリー (降下)」した特殊救難隊員に引き継ぐという連携を確認した。

引き継ぐ際は、特殊救難隊員が要救助者を確保したのちに、レスキューチューブを指示後に離脱する。要救助者に特殊救難隊員がエバックハーネスなど装着時は、ライフセーバーは特殊救難隊員から離れ (30m以上かつヘリの右前方から右側の範囲)、周囲の障害物の有無や、安全監視に従事する。

ヘリ実機のダウンウォッシュによる風速は20m/毎秒以上になる。よってマスク無しでの対応は困難である。また、海上では水面下が視認しづらいだけでなく、うねりやダウンウォッシュにより誘導ロープが動揺し、ライフセーバーの身体に絡む危険性がある。

更には、要救助者を吊り上げる際、強風などによる実機の動揺も少なくなく、水面上の特殊救難隊員もヘリの動きに合わせて大きく移動することもある。ライフセーバーは以上の事から、要救助者を速やかに引き継いだ後はその場から30m以上離れた位置で安全監視に従事すること。





訓練実施項目(3)の終了後、へりにより吊り上げられた特殊救難隊員の誘導ロープの確保を特別に体験した。



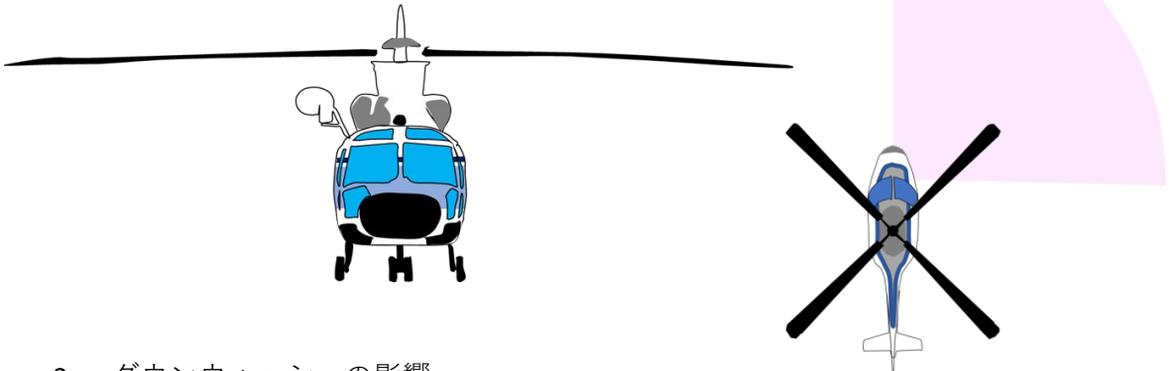
全ての訓練終了後、検討会を実施し、質疑応答や今後の訓練内容について意見交換を行った。

多くの報道陣が今回の訓練を取材に来られ、社会的に注目度の高いことを再認識した。



■各種質疑及び、ヘリの特性の確認

1. ヘリなどの諸元性能に伴う接近方法などについて
  - ① 原則、**水面上にいた場合は、不用意にその場から動くことなく、ヘリの進入角度に合わせその場で待機**する。このことはIRB及びPWCなどの動力船だけでなく、レスキューチューブのみに水面待機の場合も同様。レスキューボードなど、器材が飛ばされる可能性があるときはボードを離脱し、水面待機が望ましい。
  - ② ヘリのパイロットが視認しやすい角度は、実機右前方にあるパイロットのコクピットから右45度。
  - ③ 基本的には、風上に向かって進入する。



2. ダウンウォッシュの影響

ヘリのダウンウォッシュは、回転翼の真下に発生するため、ホバリング時には実機の直下に発生し、実機の前進時には、前方から風を受けるのと同様の作用によって実機の後方にダウンウォッシュは流れる。スライドリペリング降下は、ダウンウォッシュの影響を受けやすい対象（人、小型艇、ライフラフト等）に降下する場合に、ダウンウォッシュの影響を与えずにアプローチする降下手法である。

ヘリから降下してきた特殊救難隊員にライフセーバーが要救助者を引き継ぐ場合は、スムーズに実施できたとしても、ダウンウォッシュは不可避である。ダウンウォッシュの影響を考慮し、動力船含め、操船及び待機位置を考慮する必要がある。



3. 発煙筒投下による要救助者などのマークについて

海上保安庁のヘリなど上空から要救助者視認は、ライフセーバーのように横方向からの視認と比較し、比較的発見しやすいと推測する。

ヘリが要救助者を発見し、特殊救難隊員のような降下要員がいなかった場合など、発煙筒をヘリから投下することがある。このケースはまれだが、上記の状況があった場合、公的救助機関の指揮下のもと、発煙筒投下位置を要確認事項として認識しておく必要がある。

■今後希望する訓練項目

1. 海上にて、IRB、PWCに対するダウンウォッシュに対する影響とライフセーバーの待機方法などの検証。
2. ヘリに対しての、水面でのマークなど無線機のない状態での意思疎通方法の確認。
3. 沿岸部での合同捜索。
4. PWC、IRBによる救助技術に関する意見交換、実技訓練。
5. ヘリ実機による吊り上げ救助訓練の見学。

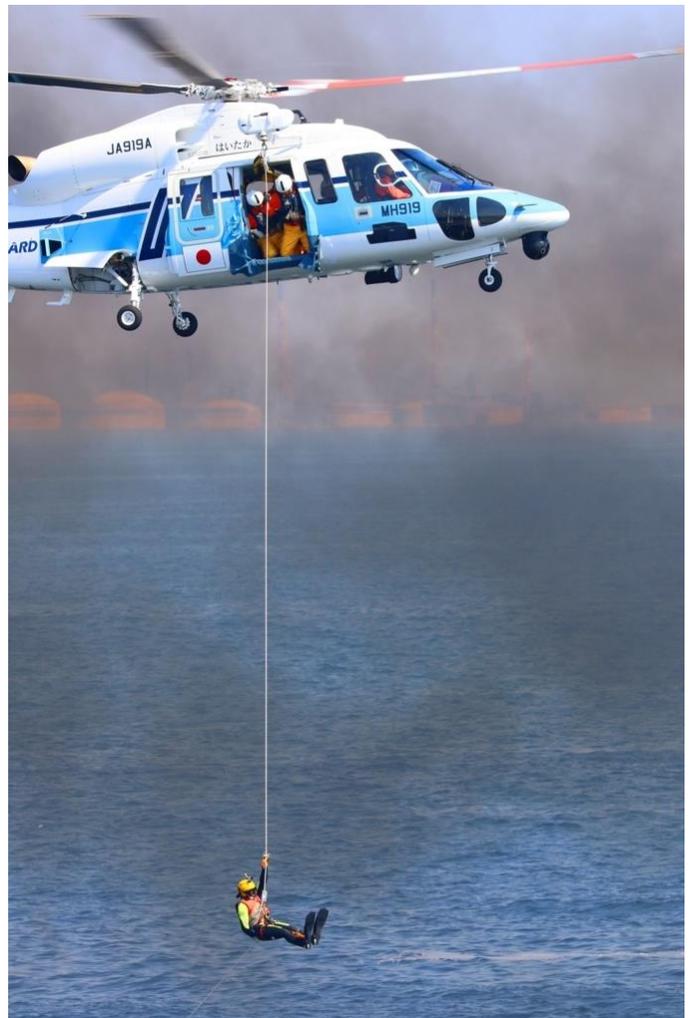
参考写真



<http://www.airbushelicopters.co.jp/news/639/>  
エアバス・ヘリコプターズ・ジャパン株式会社HP引用



[https://www.spf.org/opri/newsletter/225\\_3.html](https://www.spf.org/opri/newsletter/225_3.html)  
笹川平和財団HP引用



[https://next.rikunabi.com/journal/20170622\\_p/](https://next.rikunabi.com/journal/20170622_p/)  
株式会社リクルートキャリアHP引用